学習院大学新聞

発行所
学習院大学新聞社
東京都豊島区目白1丁目5番1号
電話(986)0221内線607
発行・編集責任者
前田　幸成
年間200円

輔仁会予算案

異例の差し戻し

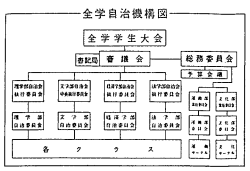
総務・文常費増額が突出

学生の支持取り付けも問われる

輔仁会評議会（輔仁会大学支部所属教職員の会）の予算増額が突出し、また学生の支持もとれていないということで、前例のない差し戻しという事態となった。輔仁会費は今年度から学生一人に付き四千五百円から六千円に値上げされている。自治会活動やサークル活動を支援するため、これを機会に予算配分を活動内容をめぐって全学的な論議がなされる必要がある。

五月二十七日三時半より北里一郎学長、同学部長、自治会委員、文化部常任委員会（以下、文常）費、社会科学研究クラブに入っていない学生に直接の影響を与えるため、現在、クラスの生徒長は、拘束アップされるべきだ」との案を示唆することには反対を表明した。飯坂良明監事、政治学科教授も、何百万もアップしたとはとても予定されていないとの発言があった。

これに対し、桜井陽一総務委員長は、「文常費アップで、運動部の総費が一応アップしているのを支援した」と説明した。



五月二十七日三時半より北里一郎学長が行われた、門脇卓爾理事長（哲学教授）が、自治会費、文化部常任委員会（以下、文常）費、社会科学研究クラブに入っていない学生に直接の影響を与えるため、現在、クラスの生徒長は、拘束アップされるべきだ」との案を示唆することには反対を表明した。飯坂良明監事、政治学科教授も、何百万もアップしたとはとても予定されていないとの発言があった。

これに対し、桜井陽一総務委員長は、「文常費アップで、運動部の総費が一応アップしているのを支援した」と説明した。

桜井陽一総務委員長代行談話

総務委員会費と文常費の割合計算し直しになったが、総務・文化部の強い要望により、総務・文化部の強い要望により、総務・文化部の強い要望により

野鳥のサンクチュアリ

学習院の豊富な緑の中で

「池の巣箱にヒナがいろう」こんなニュースが届いたのは昨月二十六日のことだった。

生物部が昨年秋に野鳥用に設置した木製巣箱の一つに、シジュウカラのヒナが育っているというのだ。それは私達にとって、とても喜ばしいニュースであった。

学習院に学・専等科内の緑豊富な自然の三方のものを求めるわけである。

春にはウグイス、秋にはキビタキ、冬にはオジロ、カケガモといった季節の鳥が院内で見られるほかに、年中を通して、シジュウカラ、スズメ、ハシブトガラス、ヒヨドリ、コゲラ、コサギ、ダイサギやゴイサギ等の留鳥が観察できる。

しかし、豊富な緑がいま少しも野鳥にとって住みよいものであるとは言えなかった。

これは、鳥の巣に適した天然の穴が極端にあまりないため、人間による院内自然の管理が、鳥に落ち着かせる環境を与えない点なら、理由としてあげられる。

そこで、野鳥が安心して住み、子育てができる場を提供しようという案が生物部で数年前から持ち上がっていた。

これまでにもいくつか案があった。例えば、池に中州を入工的に築き、カモ等水鳥の安全地帯を確保する、池の流れ口へ石を打ち込み、カワセミの止まり木を作る、巣箱を多数設置し、野鳥の住宅問題をシリで解決する、といったものである。実際、巣に適当な天然の穴は、時としてレイイノ校の校舎の前であったり、人の目の高さにあったりして、野鳥にとっては非常に落ち着かない所であることが多かった。学生の出入りが激しい校舎周辺のそういった巣穴は無駄になることが多かったのである。また、ネコにとっても低い位置の巣穴は狙い目であった。生物部は、留鳥から見える位置に、野鳥用のエサ台を設置し、ヒナを訪れる各種鳥の観察を行いたいと思っていた。

これらの案のうち、巣箱とエサ台の設置が実行されることに決定したのは一九八七年の八月末であった。立案者は生物部の女子部員であった。

学習院の学・専等科内の緑豊富な自然の三方の一所のエサ台設置場所を定め、企画申請書を添え、学生部に許可を求めた。もちろん生物部はOKをもった。

巣箱は、部員の自由設計によるオリジナル件十一個、市販キットの巣箱が十五個の計二十二個が設置された。

生物部は学生の巣箱とエサ台に番号をふる作業にとかかった。巣箱の対象は小型のシジュウカラ、エナガ、キツツキ、スズメ用のもの、ヒヨドリ、ツグミ用の中型のものが用意された。

今年五月に実際野鳥が利用されているのが観察され、ヒナ誕生の期待が高まった。

五月二十六日の観察例では、巣穴は地上に面していて、かなり間隙では見えずらい位置ではあるが、シジュウカラのヒナ二羽が巣穴に親鳥からエサをもらっていた。

巣箱Cには明八側が開認された。Hでも親鳥の往来が見撮された。

巣箱を担当した生物部員の子部では、鳥が巣を中に作るようになる迄に数年かかるものと思われていた。巣箱は人工的なものだし、周りの環境にたいしても多少の時間がかかるものと思っていたからだ。ところが鳥は初年度から来てくれた。これは嬉しいことであり、同時に大きな自信を与えた。

今回の巣穴の高さは低めであって、院内の自然は豊かであるが、野鳥を観察するには至下の工夫が必要であることがわかったといえよう。

エサ台に関しては、ヒヨドリ、ツグミ、ヒヨドリ、ツグミ、ヒヨドリ、ツグミ